

特集

2020.2.17

ノーベル・ウィーク2019 / IVA-JSPSセミナーに吉野彰氏が登壇 / JSPSフィンランド同窓会設立10周年記念式典 / 2019年度All Alumni Meetingの開催



ページ

プロローグ	1
特集	3
ニュース	15
セミナー参加者によるレポート	20
訪問・来会記録	23
北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介	24
北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介	28
学術動向	30
お知らせ	35

非科学的言説と公的ミュージアムの役割

JSPSストックホルム研究連絡センター長 津本 忠治

本号は2020年最初のニュースレターであるので、年頭の挨拶を述べるべきかも知れないが、実際の発行が2月中旬となり時期はずれの挨拶になりそうなので、それに代えて最近感じていることをエッセー風に述べてみたい。

スウェーデンの無料ミュージアム

ストックホルムに来て驚くことの一つは入場無料の博物館、美術館が多いことである。日本では博物館と美術館という表現は使い分けているようであるが、北欧ではその違いは必ずしも明確でないので、本稿では両者を含めて便宜的にミュージアムというカタカナ語を使用する。Webで検索すると無料のミュージアムはスウェーデンには19カ所あるという。その中には大幅改装後2018年に再オープンしたNational Museumやcontemporary arts と総称される現代美術作品を多く展示するModern Museum、スウェーデンの歴史を系統的に展示するSwedish History Museum、武器の歴史的変遷と戦争の悲惨さを展示するArmy Museum、多数の化石と動植物標本を展示するSwedish Museum of Natural History等々大規模で見ごたえのあるミュージアムが多くある。これらのミュージアムはスウェーデン政府のMinistry of Cultureのもと、国費で賄われているとのことである。勿論、観光客に人気のある17世紀の沈没戦艦を展示するVasa Museum や衣食住などの変遷を展示する北方民族博物館 (Nordic Museum) など、有料のところもあるが、主要なミュージアムの多くは無料である。これらのミュージアムには、子供向けの展示も多く、学校の先生に率いられた生徒の一群に遭遇することもあり、いわば教育的な目的もあるように思われる。このような教育、文化的な施設は無料で開放し、経費は税金で賄うのは当然と考えられているようである。市民への教育、文化的サービスという意味では他に公共図書館があるが、スウェーデンを含めて北欧諸国には大変良く整った図書館が多いことは国際的にも良く知られている。ストックホルムでも、小生の自宅近くの市立図書館はサークル状に多数の書籍を並べた建物のデザイン自体が

有名であるが(本ニュースレター2017年55号の表紙にもなっている)、サービスも良く住民カードがあれば誰でも無料で4週間、書籍やCDなどのデジタルデータ記録媒体の貸出ができる。国民の教育や文化活動に力を入れていることは北欧の一つの特徴であろう。

一方、日本では名だたる公的ミュージアム、例えば上野の国立科学博物館、国立西洋美術館、六本木の国立新美術館、京都の国立博物館、国立近代美術館、奈良の国立博物館、大阪の国立国際美術館等々全て有料である(ただし、月に数回無料入館日を設けているところや小中高校の生徒などを無料にしているところもあるが)。もう随分前になるかと思われるが、日本では、財務省を中心に“受益者負担”が声高く叫ばれ有料は当然という見方もあるが、小中高生や若い人さらに一般の人に日本や世界の歴史、文化や自然を科学的に学ぶ場所や機会を提供するという重要性から考えると全て無料で開放しても良いように思われる。“受益者負担”を強調する人でも、例えば公共図書館までも入館料を取るようにと主張する人はいないのではなかろうか？ 教育、文化施設が整備され広く開放されているかどうかは社会の文化度、成熟度の一つの尺度のように思われる。

地球は平面か？

話題は変わるが、最近、Webで地球は平面であるというフラットアース説を信じる人が英国や米国の一部で増えているというニュースを見てびっくり仰天した。ウィキペディアによれば地球平面協会という団体もあるという(<https://ja.wikipedia.org/wiki/地球平面協会>)。天動説が信じられていた中世でもあるまいし、今更何をか言わんや、である。また、以前から知られていることであるが、米国の一部の州ではダーウィンの進化論のような進化という概念を否定し、進化論を学校で教えることを禁ずる法律を制定する運動があり、最近では「偉大なる知性」(つまり神)が人間を含めた生命を創造したとするインテリジェント・デザイン説を主張する人たちがいる。これらの非科学的な言説は、米国のごく一部の人たちによる

(次頁に続く)

主張で北欧ではそのような迷妄的な説を信じる人はいないと思っていたが、最近ストックホルムの小生の自宅近くを散歩していたところHomeopaticaと称するホメオパシー商品を売る店があるのにびっくりした。ホメオパシーとは、「その病気や症状を起こしうる成分や原因物質を極度に薄めた溶液(レメディ―と呼ばれる)を使って、その病気や症状を治すことができる」という考えにたつて、18世紀末に提唱された説(<https://ja.wikipedia.org/wiki/ホメオパシー>)で、具体的には症状を引き起こす原因となる成分を極度に希釈した液(100の30乗倍と言っているから元の成分はほぼゼロ)を砂糖玉にしみこませたものをレメディ―と称して売っている。現在多くの科学者によってこのレメディ―の摂取効果はいわゆるプラセボ効果以上のものではないとの結論に達しており、日本でもその非科学性、危険性については数年前に当時の金澤一郎日本学術会議会長によって会長談話という形で公開されている(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-d8.pdf>)。にも関わらず、ホメオパシーを信じる人がスウェーデンにもいるということは驚きであった。このような明らかに非科学的な迷妄的な言説に影響される人が出てくることは、思想信条は個人の自由であるという民主主義社会では避けがたいのかも知れない。地球は平たいと信じるのはその人の勝手であろう。ただ、上記日本学術会議会長談話でも引用されているように、ホメオパシーを信じる医療関係者が乳児にレメディ―を与えビタミン欠乏症に陥らせ死亡させた例も報告されている。非科学的な迷妄的な言説はそれを信ずる人やその関

係者に累が及ぶだけで自己責任の問題だという考えもあるが、このようにそれだけでは済まない危険性を含んでいる。

さらに、工業化による気候変動や地球温暖化のようなこの地球上の全生物(人類を含めて)に波及する問題となると科学を無視した反科学的言説を見過ごすわけにはいかない。多くの研究者が観測し予想する地球の気候変動は、科学的データに基づいたものであり、とある国の有力政治家が今年のダボスでの世界経済フォーラムで述べたように単なる“悲観的預言者”や“終末論者”の見解ではない。このように、社会的に影響のある政治家が多くの科学者の見解を無視して気候変動を偽情報として否定するとすれば人類全体に累が及ぶかも知れない。有名なスウェーデン人Greta Thunberg氏や彼女に賛同する若者が取る方法に関しては意見が分かれるかも知れないが、科学を信じ科学者の言うことに耳を傾けよ、という主張はその通りであろう。それでも一部の人が主張する非科学的な迷妄的な言説を如何に克服するかは重要な問題である。原理的には、民主主義社会ではリーダーは多数の人の意見を重視するので(はずなので)、多くの人が正しい科学的知識を共有し、声を大にして叫べば非科学的な言説の流布を防ぎ、正すことはできるかも知れない。その意味で、例えば、進化論を実感できる化石や動植物標本の展示或いは地球の平均気温や極地の氷床の変化を分かり易く示す展示など、正しい科学的知識を人々に広く提供するミュージアムの存在は、効果は間接的ではあるが、極めて重要であると思われる。



National Museum



Swedish Museum of Natural History

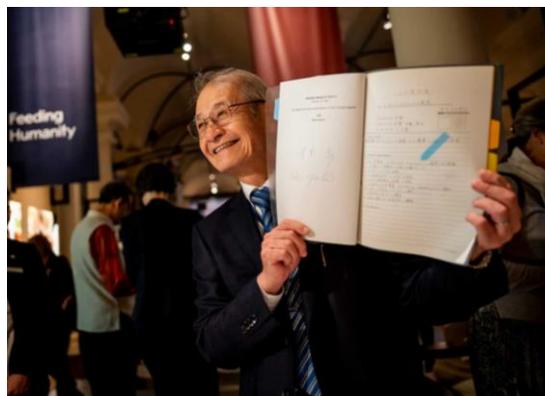
ノーベル・ウィーク2019

12月10日はAlfred Nobelの命日であり、平和賞を除く各賞の授賞式がストックホルムで行われる。毎年、12月に入ってから授賞式当日まで、ノーベル賞関連の様々なイベントが開催される。

【12月6日(金) 椅子へのサイン】

受賞者らはストックホルムの旧市街にあるノーベル博物館を訪れ、博物館内のレストランBistro Nobelにある椅子の裏側にサインを行った。また、受賞者にゆかりのある記念品を寄贈した。

2019年化学賞受賞者の吉野彰旭化成株式会社名誉フェローは、同賞の受賞につながったリチウムイオン電池の模型を寄贈した。



ノーベル博物館を訪問する吉野名誉フェロー

© Nobel Media AB 2019

Photo: Alexander Mahmoud

【12月6日(金) 文学賞受賞者及び生理学・医学賞受賞者記者会見】

13時から、スウェーデン・アカデミー(SA)において文学賞受賞者の、15時からカロリンスカ医科大学(KI)内のNobel Forumにおいて生理学・医学賞受賞者による記者会見が行われた。

【12月7日(土) 物理学賞、化学賞、経済学賞受賞者記者会見】

9時30分からノーベル博物館において、物理学賞、化学賞、経済学賞受賞者による記者会見が行われた。

【12月7日(土) 生理学・医学賞ノーベルレクチャー及びレセプション】

13時からKI内のAula Medicaにおいて、生理学・医学賞受賞者によるノーベルレクチャーと呼ばれる受賞記念講演が以下の通り開催された。

講演終了後には、KI主催の祝賀レセプションが同会場において開催された。当センターからは津本センター長、吉原副センター長が参加した。

なお、講演の映像は、講演タイトル下のURLから視聴可能。



講演するGregg氏(生理学・医学賞受賞者)

© Nobel Media AB 2019 Photo: Nanaka Adachi

生理学・医学賞

• William G. Kaelin Jr

“The von Hippel-Lindau Tumor Suppressor Protein: Insights into Oxygen Sensing”

<https://www.nobelprize.org/prizes/medicine/2019/kaelin/lecture/>

• Sir Peter J. Ratcliffe

“Elucidation of Oxygen Sensing Systems in Human and Animal Cells”

<https://www.nobelprize.org/prizes/medicine/2019/ratcliffe/lecture/>

• Gregg L. Semenza

“Hypoxia-Inducible Factors in Physiology and Medicine”

<https://www.nobelprize.org/prizes/medicine/2019/semenza/lecture/>

【12月7日(土) 文学賞ノーベルレクチャー】

16時45分からスウェーデン・アカデミーにおいて文学賞受賞者による講演が、以下の通り開催された。

文学賞

• Olga Tokarczuk (2018年度受賞者)

<https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2018/tokarczuk/lecture/>

• Peter Handke (2019年度受賞者)

<https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2019/handke/lecture/>

【12月8日(日) 物理学賞、化学賞、経済学賞ノーベルレクチャー】

9時からストックホルム大学内のAula Magnaにおいて、物理学賞、化学賞、経済学賞受賞者による講演が以下の通り開催された。2019年化学賞受賞者の吉野名誉フェローの講演も行われた。

物理学賞

• James Peebles

“How Physical Cosmology Grew”

<https://www.nobelprize.org/prizes/physics/2019/peebles/lecture/>

• Michel Mayor

“Plurality of Worlds in the Cosmos: A Dream of Antiquity,
A Modern Reality of Astrophysics

<https://www.nobelprize.org/prizes/physics/2019/mayor/lecture/>

• Didier Queloz

“Exoplanets: 51 Pegasis b and all the others ...”

<https://www.nobelprize.org/prizes/physics/2019/queloz/lecture/>



講演するMayor氏(物理学賞受賞者)

© Nobel Media AB 2019 Photo: Alexander Mahmoud

化学賞

- John B. Goodenough (Arumugam Manthiram氏が代理講演)
“Designing Lithium-ion Battery Cathodes”
<https://www.nobelprize.org/prizes/chemistry/2019/goodenough/lecture/>
- M. Stanley Whittingham
“The Origins of the Lithium Battery”
<https://www.nobelprize.org/prizes/chemistry/2019/whittingham/lecture/>
- 吉野 彰
“Brief History and Future of Lithium-ion Batteries”
<https://www.nobelprize.org/prizes/chemistry/2019/yoshino/lecture/>



講演する吉野名誉フェロー
© Nobel Media. Photo: Alexander Mahmoud



会場の様子

経済学賞

- Abhijit Banerjee
“Field experiments and the practice of economics”
<https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2019/banerjee/lecture/>
- Esther Duflo
“Field experiments and the practice of policy”
<https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2019/duflo/lecture/>
- Michael Kremer
“Experimentation, Innovation, and Economics”
<https://www.nobelprize.org/prizes/economic-sciences/2019/kremer/lecture/>

【12月8日(日) 在スウェーデン日本国大使夫妻主催祝賀レセプション】

14時30分からストックホルム市内のグランドホテルにおいて、廣木重之在スウェーデン日本国大使夫妻主催の祝賀レセプションが開催された。当センターからは、津本センター長、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員が参加した。

廣木大使、Matilda Ernkransスウェーデン教育・研究大臣の御列席の下、吉野名誉フェローは挨拶で、受賞の喜びと関係者への感謝などを述べられた。会場には、日瑞の各機関、団体の関係者のほか、スウェーデンで研究活動を行う日本人研究者も多数参加した。



レセプションでの吉野名誉フェロー

【出典】

https://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/activity_191208.html

【12月8日(日) ノーベル賞コンサート】

19時からストックホルムコンサートホールにおいて、ノーベル賞コンサートが開催された。吉野名誉フェローなどノーベル賞受賞者もコンサートを鑑賞した。

本コンサートはノーベル賞受賞を祝して毎年開催されており、一般にも公開されている。

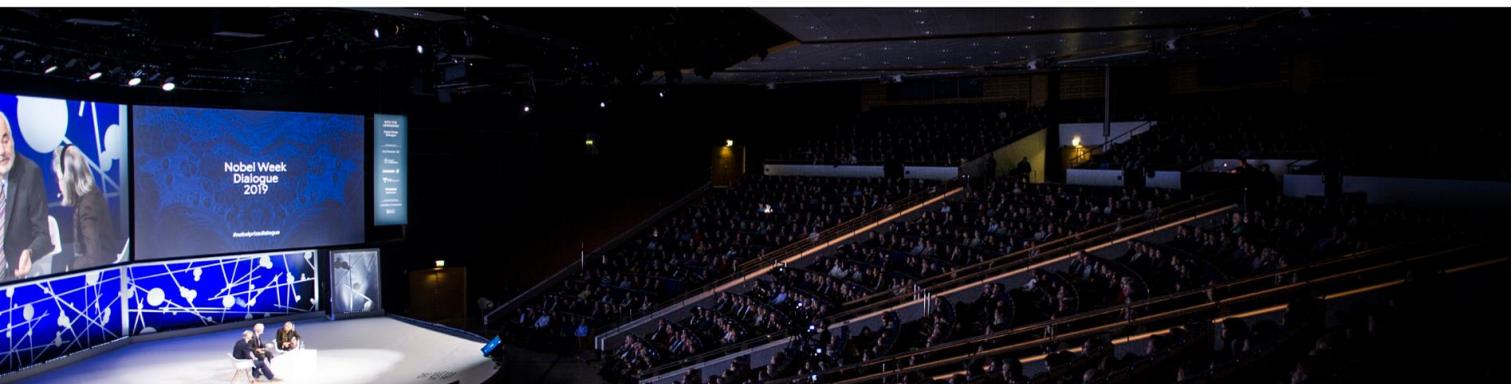
【12月9日(月) ノーベル・ウィーク・ダイアログ2019】

10時からヨーテボリのSvenska Mässanにおいて、ノーベル・ウィーク・ダイアログ2019が開催された。ノーベル・ウィーク・ダイアログは、学術・科学技術への社会の方々の関心を高め、学術の振興に寄与するため、過去のノーベル賞受賞者を含む著名な研究者・有識者を招いて行う国際シンポジウム。一般にも公開されており、有識者らの議論を間近に見ることができるほか、質疑を通して一般参加者も議論に参加できる。今回のテーマは「Into the unknown: Uncertainty, risk and opportunity」で、計20名の有識者が講演を行った。

当センターからは、津本センター長、吉原副センター長が参加したほか、JSPS本部から、里見進理事長、清水美和専門調査役、須藤絵里子係長、稲垣美実国際協力員も参加した。

当日のストリーミング映像は、以下のURLから視聴可能。

<https://www.nobelprize.org/events/nobel-week-dialogue/gothenburg-2019>



会場の様子 © Nobel Media AB 2019 Photo: Anna Svanberg

【12月9日(月) ノーベル財団・KVA主催祝賀レセプション】

18時からストックホルム市内の北方民族博物館において、ノーベル財団・KVA主催祝賀レセプションが開催された。吉野名誉フェローのほか、本年の受賞者らも参加した。本レセプションはノーベル賞受賞を祝して毎年開催されており、JSPSからは、里見理事長、津本センター長が参加した。

【12月10日(火) ノーベル賞授賞式】

16時30分からストックホルム市内のコンサートホールにおいて、ノーベル賞授賞式が開催された。JSPSからは里見理事長が招待され、参加した。

スウェーデン王家、平和賞を除く本年の受賞者の入場につき、Carl-Henrik Heldinノーベル財団理事長の挨拶により授賞式が開会した。

授賞式では物理学賞、化学賞、生理・医学賞、文学賞、経済学賞の順に、受賞を称えるスピーチとCarl XVI Gustaf国王からの賞状とメダルの授与が行われた。

化学賞の授与では、Olof Ramström KVA会員・ノーベル化学賞委員会委員からのスピーチに続いて、John Goodenough教授、Stanley Whittingham教授、吉野名誉フェローの順に、国王から賞状とメダルが授与された。すべての賞が授与された後、スウェーデン国家が斉唱され、授賞式は閉会した。



賞状とメダルを授与される吉野名誉フェロー
© Nobel Media AB 2019 Photo: Nanaka Adachi

【12月10日(火) ノーベル晩餐会】

19時からストックホルム市庁舎内のブルーホールにおいて、ノーベル晩餐会が開催された。JSPSからは里見理事長が招待され、参加した。

Carl XVI Gustaf国王の乾杯挨拶により開会し、その後、各賞の受賞者から謝辞が述べられた。また、晩餐会の最中には演劇やコンサートなどのアトラクションが催された。



ノーベル晩餐会での吉野名誉フェロー
© Nobel Media AB 2019 Photo: Nanaka Adachi

ノーベル賞授賞式及び晩餐会に参加するため、萩生田光一文部科学大臣がスウェーデンを訪問された。この機会を活用して、現地で活躍する日本人の若手研究者の意見交換会と、分子生物分野における世界的な研究機関であるScience for Life Laboratory (SciLifeLab) の視察が行われた。

【12月11日(水) 在瑞日本人若手研究者との意見交換会の開催】

ストックホルム研究連絡センターにおいて、現地で研究をしている日本人若手研究者との意見交換会を開催した。

意見交換会には、萩生田大臣、増子宏大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)、JSPSからは里見理事長、津本センター長、吉原副センター長が参加した。

また、日本人研究者は、栗飯原あや氏(ウプサラ大学大学院博士課程)、河野美恵子氏(スウェーデン自然歴史博物館ポスドク研究員)、瀧田典子氏(KIポスドク研究員)、福樹純平氏(スウェーデン農業科学大学大学博士課程)、吉原正仁氏(KIポスドク研究員)の5名が参加した。

津本センター長の司会の下、萩生田大臣の挨拶で開会し、吉原副センター長から当センターの活動紹介が行われた。その後、研究者の自己紹介が行われ、日本との研究環境の違いや、スウェーデンでの研究成果を今後の研究活動にどのように活かしていくかなどについて、活発な意見交換が行われた。



意見交換会の様子



(前列中央)萩生田大臣、(前列右から2人目)里見理事長、(前列左端)増子審議官、(後列)若手研究者

【12月12日(水) SciLifeLabの視察】

萩生田大臣がSciLifeLabを視察され、JSPSから里見理事長が参加した。冒頭で、Olli Kallioniemi所長から、歓迎の言葉と同機関の活動紹介が行われ、同機関の研究者から国際共同研究の概要などが説明された。

その後、実際に共同研究で使用されている低温電子顕微鏡などの研究機器や関連施設の視察を行った。



SciLifeLab

【出典】<https://www.scilifelab.se/about-us/locations/>

IVA-JSPSセミナーに吉野彰氏が登壇

2019年12月13日、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)において、IVA、スウェーデン戦略研究財団(SSF)、瑞日基金(SJF)、在スウェーデン日本国大使館、ストックホルム研究連絡センターの共催により、2019年度のIVA-JSPSセミナーが開催された。当センターからは、津本センター長、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員が、JSPS本部からは、里見理事長、清水専門調査役、須藤係長、稲垣国際協力員が参加した。テーマは「Future Battery Technology and Ecosystem」。

冒頭、Tuula Teeri IVA会長、廣木在スウェーデン日本国大使、里見理事長より歓迎の言葉が述べられた。

続いて、吉野名誉フェロー・2019年ノーベル化学賞受賞者より、「Current situation of Lithium Ion Battery and future」と題して、リチウムイオン電池開発までの経緯、及び今後、リチウムイオン電池が持続可能な社会の実現に向けて果たす役割について講演があった。

その後、川島信之三井化学株式会社参与社長付・ICCA室長、Elisabeth E. Endler/ Shell International Exploration & Production研究プログラムマネージャーより、「Enabling the future-Chemistry innovations for a low carbon society」と題して、低炭素社会の実現に向けた最新の研究成果や取組について説明があった。

続いて、Göran Lindberghスウェーデン王立工科大学(KTH)教授より、「Battery Research activities in Sweden」と題して、スウェーデンにおける次世代電池に関する最新の研究内容や進捗状況について言及があった。

そして、Emma Nehrenheim Northvolt 環境部門最高責任者より、「The Development of Battery Production and Ecosystem in Europe」と題して、持続可能な開発に向けた北欧における自社の取組について講演があった。

最後に、Lars Hultman SSF理事長からの閉会挨拶をもって幕を閉じた。

本セミナーには約200名が参加し、日本とスウェーデンにおける、持続可能な開発に向けた取組の重要性を認識するとともに、議論を深める有意義なものとなった。

なお、当日のストリーミング映像は、以下のURLから視聴可能:

https://www.iva.se/en/tidigare-event/future-battery-technology-and-ecosystem/?fbclid=IwAR1pJI48cnWta4zluAYzT9ZDqRe9h25qRDs_37ByKhUmSyTEfbNM5aoiYeg



左から、Bo Normark/InnoEnergyエグゼクティブ、Nehrenheim/Northvolt 環境部門最高責任者、Hultman/SSF理事長、吉野旭化成名誉フェロー、Teeri/IVA会長、川島三井化学室長、Lindbergh/KTH教授、E.Endler/Shellマネージャー、里見JSPS理事長



Teeri IVA会長



廣木在スウェーデン日本国大使



里見JSPS理事長



講演中の吉野名誉フェロー



会場の様子



レセプションの様子



会場からの質問に答える吉野名誉フェロー

日本人講師略歴



吉野 彰
旭化成株式会社名誉フェロー(2019年ノーベル化学賞受賞者)

1972年京都大学大学院工学研究科修士課程修了後、旭化成(株)(旧旭化成工業(株))入社。同イオン二次電池事業グループ長、電池材料事業開発室室長等を経て、2017年から現職。工学博士。全国発明表彰文部科学大臣発明賞、山崎貞一賞、加藤記念賞、The Charles Stark Draper Prize、紫綬褒章など多数受賞。文部科学大臣賞科学技術功労者。

JSPSフィンランド同窓会設立10周年記念式典の開催

2019年12月12日、フィンランド・アカデミー(AKA)において、フィンランド同窓会(ACF)、AKA、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス、ストックホルム研究連絡センターの共催により、ACF設立10周年記念式典が開催された。当センターからは、津本センター長、和泉国際協力員が、JSPS本部からは、家泰弘理事、中野まさき係長が参加した。

本式典は、2019年にACF設立10周年を迎えたことを受け、支援をいただいた関係者に感謝の意を示すとともに、参加者と設立10周年を祝福し、今後の同窓会の発展を祈念することを目的に開催された。

Michael Gasik ACF副会長(アアルト大学教授)の司会の下、村田隆在フィンランド日本国大使、家理事、津本センター長、田畑伸一郎北海道大学欧州ヘルシンキオフィス所長、Heikki Mannila AKA理事長より、それぞれ祝辞が述べられた。

家理事からは、関係者に対するこれまでの尽力への感謝の意と、両国の学術交流の重要性について言及された。

津本センター長からは、設立以降、ACFで主催した学術セミナーが両国の学術交流の促進に、多大に貢献したことを称えるとともに、今後の更なる同窓会の発展を祈念する旨が述べられた。

続いて、Matts Roos初代ACF会長(ヘルシンキ大学名誉教授)とKristiina Jokinen前ACF会長(産業技術総合研究所(AIST)シニア研究員)より、設立までの経緯や10年間の歩みについて、説明があった。

最後に、Jyrki Saarinen ACF次期会長(東フィンランド大学教授)からの挨拶をもって、幕を閉じた。

式典には関係機関のほか、同窓会や現地の教育・研究機関などから約40名が参加した。同窓会の理念や今後のビジョンを参加者と共有し、同窓会の更なる発展を祈念するにふさわしい式典となった。

また、2019年は日本・フィンランド外交関係樹立100周年を記念する年でもあり、とりわけ、AKA、在フィンランド日本国大使館、北海道大学欧州ヘルシンキオフィスとは、2019年を契機として、今後の同窓会活動の更なる充実に向けて、一層連携していくことを確認する上でも有意義な式典だった。



参加者との集合写真



Gasik ACF副会長



村田在フィンランド日本国大使



家JSPS理事



津本センター長



田畑所長



Mannila AKA理事長



Roos 初代ACF会長



Jokinen 前ACF会長



Saarinen ACF次期会長



式典の様子

2019年度All Alumni Meetingの開催

2019年12月12日、ACF設立10周年記念式典に引き続き、AKAにおいて、前述の4機関の共催の下、在フィンランド日本国大使館の後援により、2019年度All Alumni Meetingが開催された。

本セミナーは、日本とフィンランドの外交関係樹立100周年及びACF設立10周年記念セミナーと位置付け、両国で活躍する著名な研究者を招へいして盛大に開催された。

冒頭、家理事の開会挨拶に続き、日本の照明デザイナーの第一人者で、親善大使を務める石井幹子氏からビデオメッセージが寄せられた。その中で、日本のデザイン会社で勤務していた際に出会った一冊の本に影響されて、ヘルシンキ行きを決意したこと、そして、ヘルシンキで器具デザインを学んだ経験が、その後の自身の照明デザイナーとしてのキャリアを形成する上で大きな基盤となったことが述べられた。

続いて、照明デザイナーの石井リーサ明理氏より、「Valo from Finland, Hikari from Japan」と題して、Skypeによる特別講演が行われた。フィンランドと日本の照明作品に見られる両国の関わりについて興味深いお話があった。

その後、Maarit Karppinenアアルト大学教授より、「Novel functional materials for different energy technologies through quarter-century long Finnish-Japanese research collaboration」と題して、次世代電池の開発に関する研究や、現代のエネルギー問題についての講演があった。

続いて、田畑北海道大学欧州ヘルシンキオフィス所長より、「People and Community in the Arctic: Possibility of sustainable development」と題して、社会科学と自然科学を融合させた北極圏研究に関する共同プロジェクトについての講演があった。

また、Jokinen産業技術総合研究所(AIST)シニア研究員・前ACF会長から、「Interactions with Social Robots – Issues, challenges and future views」と題して、ロボットの言語研究に関する進捗状況について言及された。

さらに、鶴田フィンランド気象庁(FMI)シニア研究員より、「Collaboration between Finland and Japan on greenhouse gas studies」と題して、自身が携わっている温室効果ガスに関する日本とフィンランドの共同研究について講演があった。

最後に、津本センター長からの閉会挨拶をもって幕を閉じた。セミナー後は親睦会が行われ、参加者同士で交流を深めた。

本セミナーには約70名が参加し、外交関係樹立100周年とACF設立10周年を記念するにふさわしいセミナーとなった。[\(鶴田シニア研究員によるレポートはP.21参照\)](#)



講師・参加者との集合写真



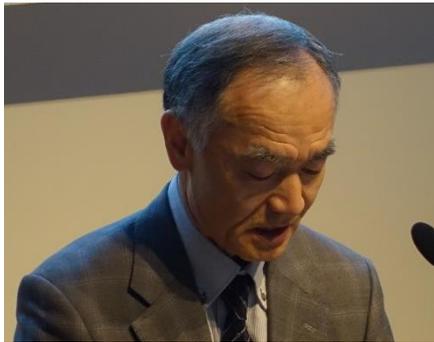
石井幹子照明デザイナー・親善大使



石井リーサ明理照明デザイナー



Karpinen教授



田畑所長



Jokinen 前ACF会長



鶴田シニア研究員

日本人講師略歴



石井 幹子
照明デザイナー・親善大使

1962年東京藝術大学美術学部卒業後、1965年渡欧し、ヘルシンキ(フィンランド)やデュッセルドルフにて照明デザインに従事。帰国後、石井幹子デザイン事務所を設立し、東京タワーや明石海峡大橋、その他国内外の数々の有名建築などを手掛けた。大蔵省(当時)国有財産中央環境審議会会員や建設省(当時)建築審議会会員などを歴任。日本照明学会学会賞、北アメリカ照明学会大賞、東京都文化賞、紫綬褒章など多数受賞。



石井 リーサ明理
照明デザイナー

母は照明デザイナーの石井幹子。日米仏でアートとデザインを学び、照明デザイン事務所勤務後、2004年にI.C.O.N.を設立。現在パリと東京を拠点に、世界各地での照明デザイン・プロジェクトの傍ら、写真・絵画製作、講演、執筆活動も行う。主な作品にジャポニスム2018エッフェル塔特別ライトアップ、ボンビドーセンター・メッス、銀座・歌舞伎座京都など。フランス照明デザイナー協会正会員。国際照明デザイナー協会正会員。2009年トロフィー・ルミヴィル、2015年フランス照明デザイナー協会照明デザイン大賞、北米照明学会デザイン賞等多数受賞。

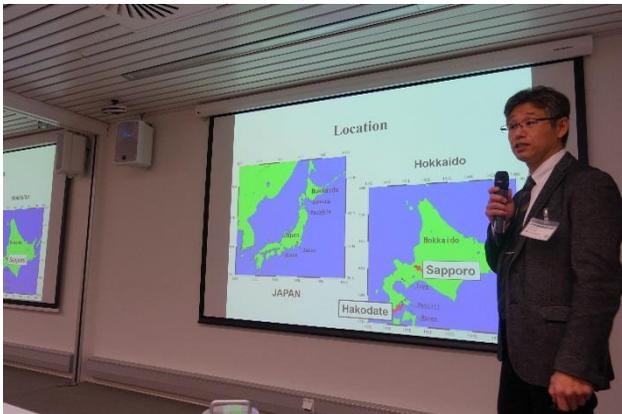
2019年度JSPSノルウェー同窓会セミナーの開催

2019年11月19日、ノルウェー研究評議会(RCN)において、ノルウェー同窓会(ACN)セミナーが開催された。テーマは「Science-based innovation: connecting research and business for a sustainable future」。ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長と和泉国際協力員が参加した。

Alexander Karl Rothkopf(幹部会委員(スタヴァンゲル大学准教授)の挨拶で開会し、日本からの招へい講師の清水宗敬北海道大学准教授から、野生と養殖の鮭を比較した成長や、生理学的観点からのイノベーションについて言及があった。このほか3名の研究者や企業経営者から講演が行われた。続いて、「サイエンスイノベーションがSDGsの目標達成にいかに関与することができるか」をテーマに、パネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは、参加者からの質問も交えながら活発な議論が行われた。セミナー終了後には、レセプションが行われ、参加者間で親睦を深める機会となった。

本セミナーには約40名が参加し、ACNの今後の発展を期待させるセミナーとなった。

[\(清水准教授によるレポートはP.22参照\)](#)



講演を行う清水准教授



参加者との集合写真

2019年度外務大臣表彰伝達式の実施

2019年11月26日、長年にわたる日本・スウェーデン間の交流、両国間の相互理解の増進及び関係強化への貢献を称え、廣木在スウェーデン日本国大使より2019年度外務大臣表彰を受けた鈴木満リンネ大学相談役・元助教授に対し、表彰状伝達式が大使公邸で行われた。



鈴木相談役(左)と廣木大使(右)

【出典】在スウェーデン
日本国大使館
https://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/activitiy_191126.html

2019年度JSPSフィンランド同窓会合同幹部会総会の開催

2019年12月12日、AKAにおいて、ACF合同幹部会総会が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは和泉国際協力員が参加した。

総会では、Ville Syrjälä会長の2019年12月での退任と、2020年1月からJyrki Saarinen氏（東フィンランド大学教授）が新会長に就任することが承認された。加えて、2019年度の活動報告や2020年度の活動計画についての意見交換が行われた。



Saarinen新会長

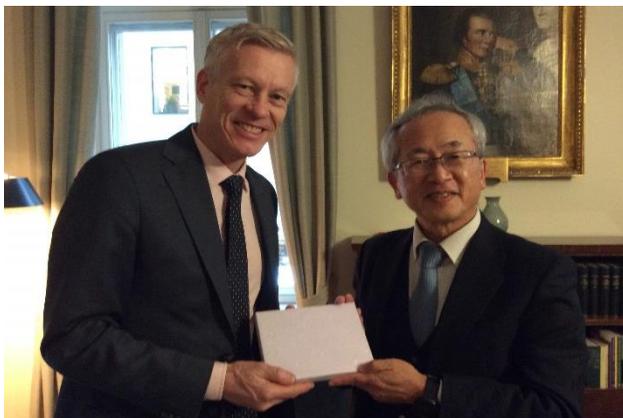
【出典】University of Eastern Finland
<https://www.uef.fi/en/web/physics/jyrki-saarinen>

ヘルシンキ大学総長への表敬訪問及びJSPSフィンランド同窓会幹部との意見交換会の実施

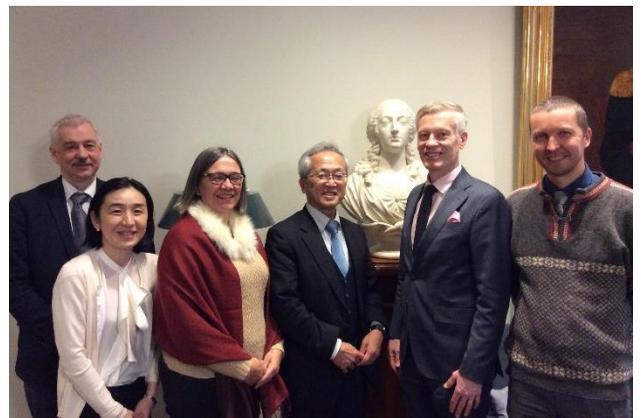
2019年12月13日、家理事はヘルシンキ大学を訪問しKaarle Hämeri総長に表敬訪問を行った。同理事は、前日に開催されたAll Alumni Meetingに参加するためにフィンランドを訪れ、その一環で今回の表敬訪問が実現した。表敬訪問には、ACFからMichael Gasik副会長、Joni Kujansuu幹部会委員（ヘルシンキ大学研究コーディネーター）、Jokinen前会長が、JSPSから中野係長、和泉国際協力員が同席した。

冒頭、Hämeri総長からヘルシンキ大学の紹介の後、同大学の戦略や研究分野について説明があった。その後、家理事からJSPSの国際交流プログラムと同窓会活動の紹介を行い、同窓会活動への協力を依頼した。Hämeri総長からは、必要な協力を惜しまないとの前向きなコメントをいただいた。

続いて、家理事と同窓会幹部で同窓会活動の現状や今後の発展に向けての意見交換を行った。今後も当センターと連携を密にとり、ACFの発展のために相互に協力することを確認した。



Hämeri総長(左)と家理事(右)



左からGasik副会長、中野係長、Jokinen前会長、家理事、Hämeri総長、Kujansuu幹部会委員

2019年度第2回JSPSデンマーク同窓会幹部会の開催

2019年12月17日、Skypeを利用して、本年度第2回JSPSデンマーク同窓会(ACD)幹部会が開催された。

ACDからは、Carl Winsløw会長(コペンハーゲン大学教授)、Anemone Platz副会長(オーフス大学准教授)、Gunhild Borggreen幹部会委員(コペンハーゲン大学准教授)、Jacob Kreutzfeldt幹部会委員(Otocom研究員兼コンサルタント)、Lelia Lo Leggio幹部会委員(コペンハーゲン大学教授)が、ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、石井現地職員が参加した。

冒頭、Winsløw会長からの開会挨拶の後、2019年度に予定されているイベントの準備の進捗状況の確認や、BRIDGEフェロースhipなどへの応募者増加の方策について意見交換を行った。



幹部会の様子

在スウェーデン日本国大使主催新年祝賀会への参加

2020年1月30日、スウェーデンに在留している日本人や日本と関係の深いスウェーデン人を招いて、新年祝賀会が在スウェーデン日本国大使公邸で開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員が参加した。

冒頭、廣木在スウェーデン日本国大使、金子葉子ストックホルム日本人会会長から新年の挨拶として、2019年の日瑞間での出来事を振り返り、両国の更なる交流深化への期待が述べられた。続いて来場者の掛け声に合わせて鏡開きが行われ、長野彰理 日本商工会会長から乾杯の挨拶が行われた。

会場ではおせち料理、雑煮、日本酒等の日本の正月料理が振舞われ、参加者は和やかな雰囲気の中で親睦を深めた。



廣木大使に新年の挨拶をする津本センター長ほかセンター職員(写真提供:在スウェーデン日本国大使館)

2019年度JSPSスウェーデン同窓会合同幹部会総会の開催

2020年2月5日、スウェーデン自然歴史博物館において、JSPSスウェーデン同窓会合同幹部会総会が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、石井現地職員が参加した。

冒頭、Elin Palm 会長と津本センター長より開会の挨拶があった。その後、2019年度の活動報告や2020年度の活動計画についての審議が行われた。また、積極的な会員の獲得やセミナーの充実に向けた方策について意見交換が行われた。



総会の様子

第8回Sweden-Japan Academic Networkの開催

2020年2月5日、スウェーデン自然歴史博物館において、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)、在スウェーデン日本国大使館、SAC、ストックホルム研究連絡センターの共催により、第8回Sweden-Japan Academic Networkが開催された。

冒頭、Göran K. Hansson KVA事務総長、廣木在スウェーデン日本国大使、津本センター長より開会挨拶があった。

続いて、Tomas Karlssonスウェーデン王立工科大学教授から、「Planned science with the Japanese-Swedish electric field instrument on board the BepiColombo mission to planet Mercury」と題して、水星における日本とスウェーデンの共同研究について講演があった。

その後、二穴喜文スウェーデン宇宙物理研究所(IRF)准教授から、「Chasing water in the Solar System: Exploration of Moon, Mars, Venus, and Jupiter system」と題して、太陽系惑星における水の研究について講演が行われた。

セミナー終了後にはレセプションが行われ、参加者間で親睦を深めた。本セミナーには約50名が参加し、両国の研究者が交流を深める良い機会となった。



講演する二穴准教授



講演するKarlsson教授

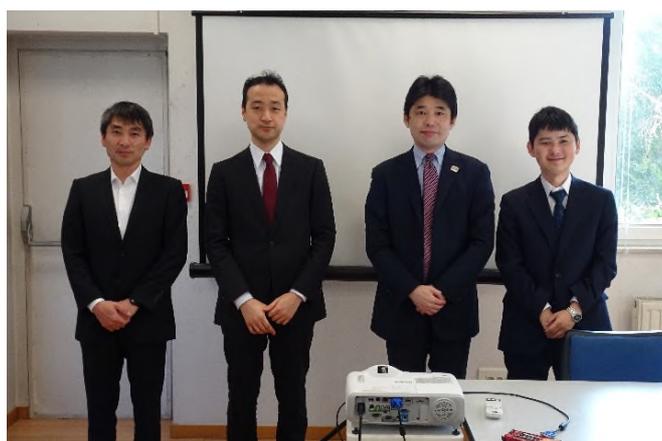
2019年度欧州副センター長会議への参加

2020年2月7日、ストラスブール研究連絡センターにおいて、欧州副センター長会議が開催された。本会議には、ロンドン研究連絡センターの安東正隆副センター長、ストラスブール研究連絡センターの飯嶋博副センター長、ボン研究連絡センターの青山誠副センター長に加え、ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長が出席した。

本会議では、各海外センターにおける運営状況や、各センターにおける共通の課題について情報交換や意見交換を行った。今後も、より充実したセンター運営に向けて、引き続き海外センター間で連携を図っていくことを確認した。



会議の様子



左から、飯嶋副センター長、安東副センター長、吉原副センター長、青山副センター長



スウェーデンの冬
【出典】David Mark

セミナー参加者によるレポート

2019年度第2回JSPSスウェーデン同窓会セミナーに参加して

2019年10月28日、カロリンスカ医科大学(KI)南フツディングキャンパスにおいて、第2回JSPSスウェーデン同窓会セミナーが開催された。テーマは、「筋骨格分野の研究」。

日本から招へいた越智光夫学長の広島大学学長就任後、初めてKIに訪問いただくもので、私が本セミナーの司会を務めたことは大変光栄だった。なぜなら、越智学長と私は何十年にも渡って整形外科医として、整形外科スポーツ医学と膝の手術に関する共通の関心を持っていたからである。私たちの親交は、私が客員教授として香港中文大学、アジアスポーツ連盟に籍を置いた23年前に遡る。

セミナーでは、まず始めに、Maria Eriksdotter KI学長と津本センター長より開会挨拶があった。

次に、Li Felländer-Tsai KI教授が「Trends in orthopedic specialty training in Sweden and Europe」と題して講演を行った。同教授は、安全性と標準性を保証するシュミレーターを用いたトレーニングと、従来のトレーニングを比較した研究について言及した。

越智学長からは、「Cartilage repair -emerging technology-」と題して、移植手術後に幹細胞を軟骨に誘導する画期的な方法について説明があった。外部の磁力によって操作できる鉄マーカーを利用して幹細胞を軟骨の損傷部分まで誘導するという考えは、非常に素晴らしいものであった。

私からは、「MRN, an international network for musculoskeletal research」と題して、MRNの活動について講演を行った。MRNとは、2012年に同僚と共に香港で始めた、当初13大学で構成された筋骨格研究のための国際的なネットワークである。現在、MRNはKI、香港中文大学、台湾医科大学の3大学間で共同研究プログラムや学生・研究者の交換留学を併せたプログラムを実施している。

Hans Berg KI講師からは、「整形外科患者の筋萎縮とパフォーマンス低下」と題したプロジェクトについて紹介があり、本来あるべき姿であるが、なかなか実行することが難しいとされる、機能性と関連がある筋肉の量と構造を測定する方法について説明があった。

カロリンスカ医科大学教授 Christer Rolf

Yan Li KI研究員は、「被切断者のための骨セメント両方プロテナー」と題した講演を行った。被切断者の四肢の接合の問題は、越智学長の講演内容と共通する部分もあった。外科医にとって手術はある程度容易にできるが、治癒のプロセスに至っては未開拓の部分も多い。

Björn Rydevik ヨーテボリ大学教授からは、「Back pain: new insights into old problems」と題して、講演が行われた。現在、数多くの人々がこの症状に悩まされているにも関わらず、原因など多くの点が解明されていない分野である。

Stefan Lohmander ルンド大学教授は、整形外科医学研究の中核とも言える「根拠ベースであること」、そして「科学の基本原則を研究にどう活用させるか」という課題に果敢に挑んだ。

最後に、井芹 健 KI研究員より、「Hip fracture trend in Swedish general population and dialysis patients」と題した発表が行われた。股関節骨折は長い間、透析患者特有のものであるといわれてきたが、現在、その説は説明がつかないとされている。

セミナー終了後はストックホルム研究連絡センター主催のレセプションが行われた。

本セミナーに越智学長を招へいできたことは大変喜ばしいことである。セミナー終了後、今回の越智学長との再会を機に、広島大学から客員教授としての招待を受けた。日本への訪問を2020年の春に控えている。このような機会を通して、両国の学術交流に貢献していきたい。(Rolf教授から執筆いただいた[2019年度冬号\(第39号\)英語版](#)を当センターで和訳)



講演するRolf教授

セミナー参加者によるレポート

2019年度All Alumni Meetingに参加して

フィンランド気象庁シニア研究員 鶴田 青希

2019年12月12日、ヘルシンキで開催されたJSPS All Alumni Meetingでは、日本とフィンランドの国交樹立100周年及びフィンランド同窓会設立10周年を記念して、様々な分野の共同研究について、両国で活躍するデザイナーと研究者より講演が行われた。

まず初めに日本の照明デザイナーの第一人者で親善大使を務める石井幹子さんからビデオメッセージをいただいた。「照明デザイナー」という分野が日本では職業としてまだ発展していなかった1960年代からその重要性や可能性を示してこられたわけだが、ルーツの1つにフィンランドでの経験が関わっていることを知った。続けてビデオ通話で講演された照明デザイナーの石井リーサ明理さんからはお二人の作品にみえるフィンランドデザインの影響などを教えていただき、またパリ・エッフェル塔でのイルミネーションショーの様子を見せていただいた。中でも「日本人もフィンランド人も柔らかい拡散するような照明を好む」というのは興味深い文化の共通性であった。

続いてAalto大学のMaarit Karppinen教授より「Novel functional materials for different energy technologies through quarter-century long Finnish-Japanese research collaboration」というタイトルの下、次世代電池などの開発についてお話があった。自身の日本留学の経験を経て、日本とフィンランドで研究室を運用し、両国の学生を育てており、まさに共同研究を担う第一人者である。日本の次世代リニアモーターカーに搭載予定の電池など、エネルギー問題や持続可能な生活に直接的に繋がる開発は今後更に重要視されるであろう。

北海道大学の田畑伸一郎教授からは「People and Community in the Arctic: Possibility of sustainable development」というタイトルの下、社会的な視点からの北極圏研究についてお話があった。フィンランドと日本はロシアの隣国であり、北極研究に力を入れているが、自然科学との共同プロジェクトは初めてとのこと。北極圏の温暖化は、経済効果があるため現地民からはポジティブな方向に受け入れられているが、一方で自然災害が増えるなどネガティブな面もあり、折り合いをつけるのが難しい問題だ。まずは現地の方々に現状を知ってもらうこと-情報共有と教育から-というのはフィンランド

のケッコネン政策に通じるものを感じた。

また、産業技術総合研究所の研究員で元フィンランド同窓会会長のKristiina Jokinen博士より「Interactions with Social Robots – Issues, challenges and future views」というタイトルの下、ロボットの言語研究についてお話があった。今後、日本では特に、少子高齢化が加速し、介護などの分野でロボットが活躍することになる。円滑なコミュニケーションとはどのようにして成り立つのか。言葉のやり取りだけでなく行動も含めた対話が可能になり、頼れるパートナーになれるようロボットは日々進化しているのである。

最後に、筆者が「Collaboration between Finland and Japan on greenhouse gas studies」というタイトルの下、日本の温室効果ガス観測衛星を使って行われているフィンランドの研究について発表した。気候変動・地球温暖化に対するフィンランド人の意識の高さにはいつも驚かされるが、今回も参加者の方々から植物の影響や個人で取り組めることなどについて幅広い質問やコメントをいただいた。日本でもフィンランドのように個々の責任意識が高まればと思う。

本セミナーでは芸術、科学、社会学、工学と、幅広い分野で共同研究が行われていることを知ることができた。また、普段関わりの少ない他分野の専門家との交流は大変貴重な機会であった。今回発表されたのはごく一部であるが、これからも様々な形で協力し、友好的な両国関係を築いていければ幸いである。



講演を行う鶴田シニア研究員

セミナー参加者によるレポート

2019年度JSPSノルウェー同窓会セミナーに参加して

北海道大学大学院水産科学研究院准教授 清水 宗敬

筆者は、現在、ノルウェー・ベルゲン大学の Ivar Rønnestad 教授や Tom Ole Nilsen 准教授らと「持続的なサケマス養殖業のための魚類生理学」という国際共同教育・研究プロジェクトを実施している。これは、Research Council of Norway (RCN) の INTPART 事業による助成を受けて2017年から開始した3年間のプロジェクトである。日本側は北海道大学、宮城教育大学、東京大学、聖マリアンナ医科大学、名古屋大学及び増養殖研究所でグループを作り、相手側と毎年2週間のサマーコースや学生派遣を行ってきた。この活動が縁で、2019年11月19日にオスロで開かれたJSPSノルウェー同窓会セミナーにて発表する機会をいただいた。

今回は記念すべき第1回目だったが、日本からの講演者は私だけだったので気が引き締まった。講演タイトルは分野が全く異なる4題が並んでおり、しかもセミナーのテーマは Science-based innovation: connecting research and business for a sustainable future という大きなものだったので、発表準備にそれなりの時間を費やした。発表ファイルも準備できたところに、主催者の Alexander Rothkopf 博士から、パネルディスカッションで話し合う次のようなテーマが送られてきた。「1. 科学はどのように既存のビジネスモデルを持続可能なものへと変革できるのか?」、「2. 科学に立脚した経済を実現するために、大学や研究助成機関は何ができるのか?」、「3. 科学は経済の無限成長パラダイムを実現できるのか?」1つ1つが難問な上に、内容が広い。少々重い気分で日本を発った。

オスロに到着し、セミナー前日はホテルに籠もってテーマに対する回答を考えた。当日、RCNに到着すると、かつての指導学生で、現在はJSPS/RCNの特定国派遣研究者としてベルゲンでポスドクをしている金子信人氏が来てくれていた。セミナーでは、自分は上述のプロジェクトを簡単に紹介した後、魚類の成長を調節する内分泌系において、行き過ぎを防ぐフィードバックループが大事だということを話した。そして、このようなループは社会や経済の成長においても同様に重要であることを言及した。これはテーマ3への自分の回答でもある。他の3名の講演は、AIを活用した外国人のための日本語学習ツール、

水素・燃料電池実現のための材料開発、及び新聞を例にしたデジタル社会への転換というものであった。全くの別分野であったにも関わらず、分かりやすく興味深い内容であった。懸念だったパネルディスカッションであるが、論点を絞るのが難しかったものの、色々な視点からの意見が出た良いものであった。今回、普段では接点がない分野の研究者と交流を持てたのは貴重な経験だった。このような機会を与えていただいたJSPSストックホルム研究連絡センターとRothkopf博士に厚く感謝申し上げる。



講演を行う清水准教授



パネルディスカッションの様子

ストックホルム研究連絡センターへの来会

関村 直人 東京大学副学長の来会(2019年12月2日)

関村直人東京大学副学長と東京大学職員8名が来会した。国際業務に関する海外研修のために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。

互いの北欧での活動状況や、同大学の学生や職員の国際化政策等について意見交換を行った。

前列左から2番目：関村副学長



二穴 喜文 スウェーデン宇宙物理研究所(IRF)准教授の来会(2020年2月4日)

二穴喜文スウェーデン宇宙物理研究所(IRF)准教授が来会した。同准教授は、翌日に開催された第8回 Sweden-Japan Academic Network Seminarでの講演のためにストックホルムを訪問し、この機会を活用して当センターを訪問した。セミナーの打合せの後、当センターからは活動状況を紹介します、日瑞の学术交流の更なる促進に向けて意見交換を行った。

中央：二穴准教授



吉川 博子 JSPS本部国際協力員の来会(2020年2月5日)

吉川博子JSPS本部大学連携課国際協力員が来会した。同国際協力員は当日開催された Sweden-Japan Academic Network Seminarのために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。

当センターからは活動状況や業務内容説明などを行った。



北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介



ラトビア研究評議会 (LAS: Latvian Academy of Sciences)

1946年に設立されたラトビア最大の研究助成機関。ラトビア人研究者の国際的な活躍への支援に力を入れており、多種多様な国際プログラムを提供している。

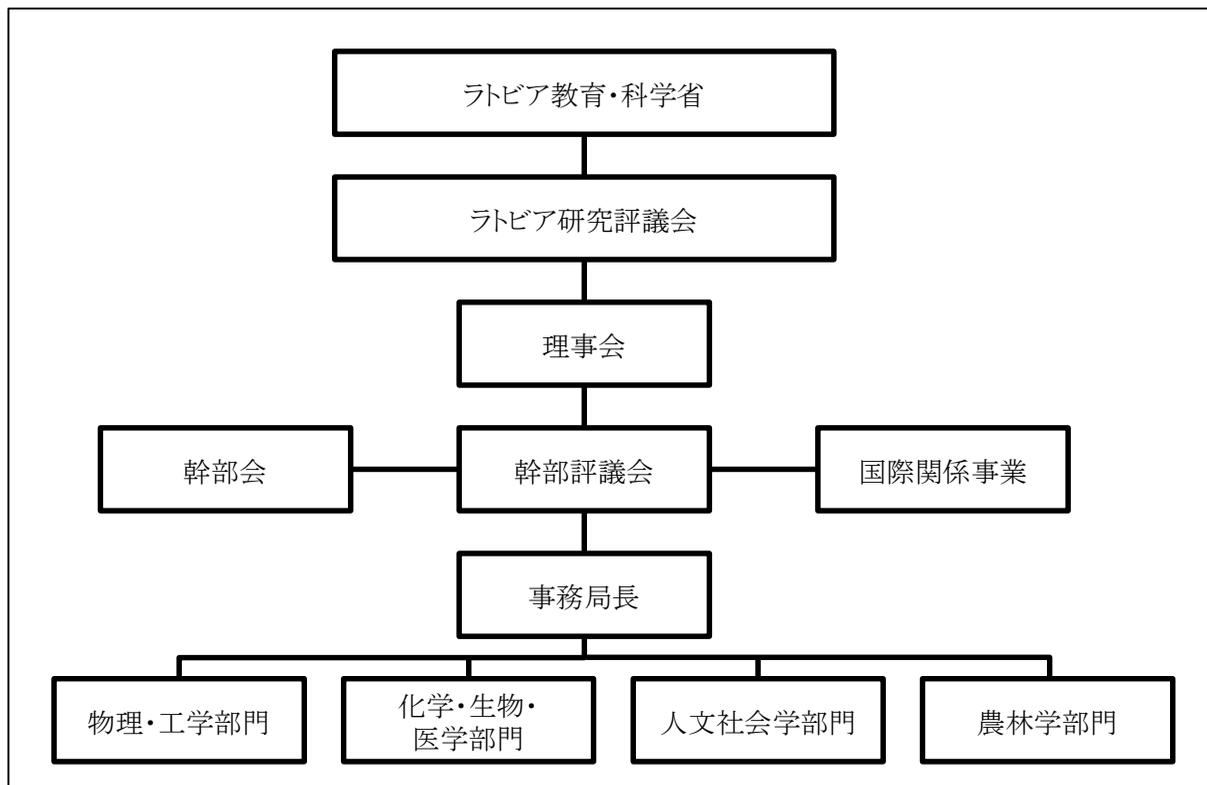
1. 組織概要

- 設立: 1946年
- 理事長: Ojārs Spārītis
- 事務局長: Andrejs Siliņš
- 主な取組
 - (1) ラトビア人研究者の国際的な活躍を支援
 - ・国際共同研究プロジェクト等への助成
 - (2) 教育や研究に係る情報発信
 - ・科学普及啓発セミナーなどの開催
 - ・査読付き学術誌「Proceedings of the Latvian Academy of Sciences」を発行
 - ・刊行誌「Science Bulletin」を通しての普及啓発
 - (3) 顕彰事業
 - ・「Grand Medal of the Latvian Academy of Sciences」などの授与を通して、優れた業績を残した研究者を顕彰
- 組織: 最高意思決定機関の理事会の下、4つの関係部局で構成
- 組織図:



Ojārs Spārītis理事長

【出典】
http://www.lza.lv/images/stories/YearBook_2019.pdf



北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

2. 主な助成プログラムの概要

① 二国間共同研究プロジェクトに対する助成

- ・現在、エストニア、フィンランド、ドイツ、フランス、イタリアなどの約30の関係機関と二国間協力協定を締結し、これに基づく共同研究を助成。関係機関の詳細については以下を参照：

http://www.lza.lv/index.php?option=com_content&task=view&id=841&Itemid=151

- ・二国間共同研究の具体的事例：

(1) ラトビア研究評議会とチェコ研究評議会 (期間：2019年～2021年)

テーマ1: Thin membranes for optoelectronics - preparation and defect studies II

テーマ2: Latvian-West Slavic linguistic and cultural connections: Past, Present, Perspectives

(2) ラトビア研究評議会とポーランド研究評議会 (期間：2018年～2020年)

テーマ1: The past in the present. Post-soviet heritage in Poland and Latvia II

テーマ2: Livonia and the Polish-Lithuanian Republic from the Sixteenth to the Eighteenth Century

テーマ3: Polish-Latvian, Latvian-Polish linguistic and cultural connections

② 北欧・バルト三国間共同研究プロジェクトに対する助成

- ・エストニア、リトアニアの各機関とは三国間協力協定を締結し、これに基づく共同研究や研究者交流を助成
- ・バルト三国に、フィンランドを加えた4か国のアカデミーの共催により、Baltic Conference on Intellectual Cooperationを、2年に1度、4か国の持ち回りで開催



2015年に開催されたBaltic Conference on Intellectual Cooperationで、4か国のアカデミーの理事長が勢ぞろい

【出典】http://www.lza.lv/images/stories/YearBook_2019.pdf

3. 主な国際連携

① ALLEA (European Federation of Academies of Sciences and Humanities)

- ・欧州における科学、研究、イノベーション分野における学術連合

② EASAC (Science Advice for the Benefit of Europe)

- ・欧州の政策立法機関に対して、科学的な見地から、環境科学・生物化学・エネルギー分野の助言を行うための連合体

③ ICSU (International Science Council)

- ・社会と科学技術分野にかかる問題の解決に向けて取り組む、各国の関係機関、国際科学技術連合組織で構成された非政府組織

④ UAI (Uncertainty in Artificial Intelligence)

- ・人文科学と社会科学分野における各国のアカデミーの連合体

⑤ IAP (InterAcademy Partnership)

- ・科学技術、医学、工学分野における既存のアカデミーの連合体



ラトビア研究評議会。最上階の展望台は観光名所の1つ

【出典】http://www.lza.lv/images/stories/YearBook_2019.pdf

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介



ノルウェー国際協力・高等教育推進庁 (Diku)

ノルウェーの高等教育機関に対して、主に研究力向上、国際化、教育のデジタル化を促進するために設立された、ノルウェー教育・研究省傘下の研究助成機関。ストックホルム研究連絡センターとは、Norway-Japan Academic等のセミナーを共催で開催するなど、ノルウェーの連携機関の1つ。

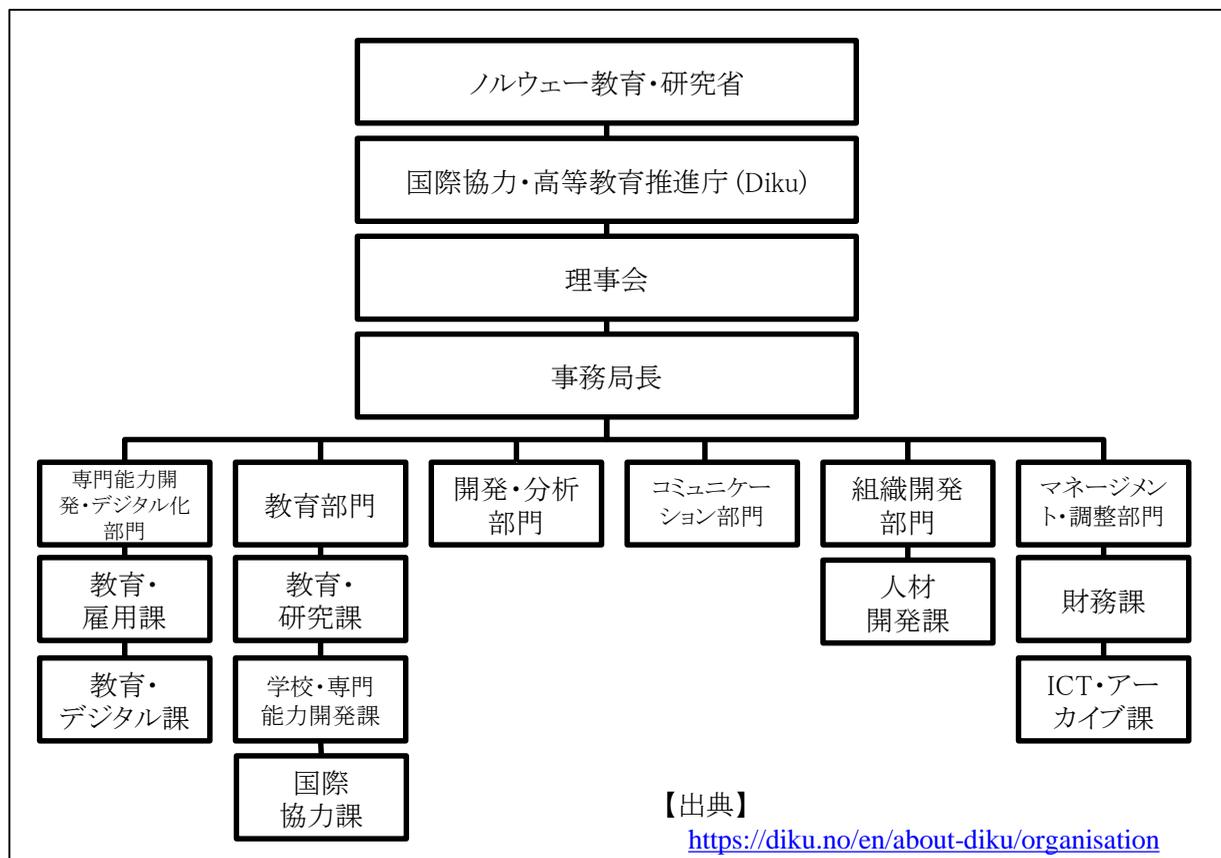
1. 組織概要

- 理事長: Kristin Margrethe Flornes
- 事務局長: Harald E. Nybølet
- 職員数: 約130名
- 主な取組
 - (1) 教育や研究に係る情報発信
 - ・科学普及啓発セミナーなどの開催
 - (2) 教育・研究機関の国際化推進
 - ・多種多様な国際的プログラムの提供
 - (3) 国内の学術動向に係る調査の実施
 - ・国内の学術動向に係る調査を実施し、結果を公表
- 組織: 最高意思決定機関である理事会の下、6つの関係部局、8つの関係課で構成
- 組織図:



Kristin Margrethe Flornes理事長
【出典】

<https://www.ntva.no/medlemmer/kristin-margrethe-flornes/>



北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

2. 主な助成プログラムの概要

①Nordplus Higher Education

- ・北欧閣僚理事会の教育プログラムのうち、高等教育機関に特化したもの。2020年度の全助成額は約1000万ユーロ(*約12億円)

②Norwegian Artistic Research Program

- ・ノルウェーの文化や芸術振興を支援するプログラムで、最長で4年間支援。
2019年度は研究者1人あたり、年間90万ノルウェークローネ(約1,074万円*)を支援

③NORPART (Norwegian Partnership Programme for Global Academic Cooperation)

- ・ノルウェー教育・研究省と外務省が助成する国際的な学術交流促進のプログラム

表1 Dikuの助成するプロジェクト総数・助成総額

年	プロジェクト総数	うちNOKでの配分額 (日本円換算額)	うちEuroでの配分額 (日本円換算額)
2015	841	約7,400万(約8.7億円)	約3,400万(約40億円)
2016	864	約3億4,300万(約40億円)	約2,900万(約35億円)
2017	839	約1億5,000万(約18億円)	約3,200万(約38億円)
2018	835	約2億1,000万(約25億円)	約3,300万(約40億円)
2019	812	約1億9,000万(約23億円)	約3,900万(約47億円)

表2 Dikuの助成する日本の研究機関に対するプロジェクト総数・助成総額

年	プロジェクト総数	うちNOKでの配分額 (日本円換算額)	うちEuroでの配分額 (日本円換算額)
2015	5	約620万(約7,400万円)	—
2016	4	約440万(約5,200万円)	—
2017	5	約460万(約5,500万円)	—
2018	1	約30万(約360万円)	—
2019	1	約29万(約340万円)	—

3. 主な国際連携

①Erasmus+

- ・欧州連合(EU)による教育、訓練、青少年、スポーツを対象とする助成プログラム

②Cooperation Programme with Eurasia

- ・ノルウェーとユーラシア大陸国(ウクライナ、モルドバ、ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャン、ベラルーシ、カザフスタン、タジキスタン)との二国間の学術交流を促進するためのプログラム

③UTFORSK

- ・ノルウェーとブラジル、中国、インド、日本、ロシア、南アフリカとの二国間の学術交流を促進するためのプログラム

北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

今回は、2016年からノルウェーのNORCE研究所(Norwegian Research Centre AS)で、ポストドクトラルフェローとして活躍されている金子信人さんを紹介する。

金子 信人 (かねこ のぶと)



略歴:

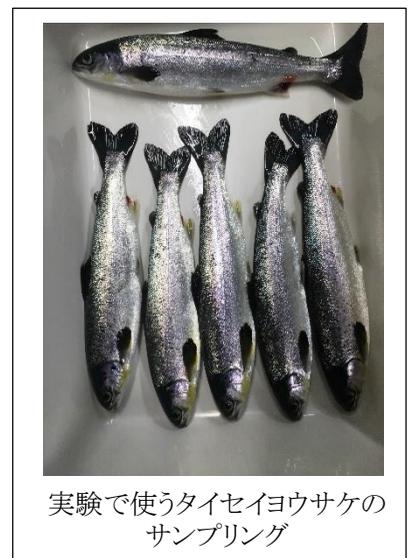
- | | |
|---------------|---|
| 2012年 | 北海道大学水産学部海洋生物科学科卒業 |
| 2014年 | 北海道大学大学院水産科学研究院海洋応用生命科学専攻修士課程修了 |
| 2017年 | 北海道大学大学院水産科学研究院海洋応用生命科学専攻博士課程修了
博士(水産科学)取得 |
| 2016年 - 2018年 | 北海道大学大学院水産科学研究院(日本学術振興会 特別研究員DC2/PD) |
| 2016年4月 - 現在 | NORCE研究所(Norwegian Research Centre AS) ポストドクトラルフェロー
(日本学術振興会 特定国派遣研究者) |

Q: 現在、ノルウェーではどんな研究をされていますか？簡単に教えてください。

A: 私はサケ類の成長がどのようなメカニズムにより制御されているかを研究しています。現在は、魚の血液中にある、ストレス下で誘導され成長の停滞を起こすホルモンに着目し、これをバイオマーカーとして使えないか検討しています。

Q: 現在の研究分野に興味を持ったきっかけを教えてください。

A: もともとは魚の生態(回遊行動や種内・種間関係など)に興味がありましたが、それらのトリガーや調節には身体の中で起こる生理的な反応が重要であると考えたのがきっかけです。



実験で使うタイセイヨウサケの
サンプリング

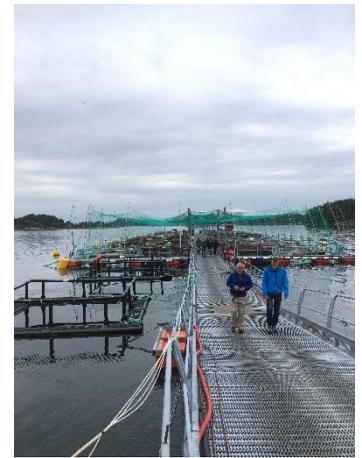
北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

Q: 現在の所属機関を選択した理由は何ですか？

A: 現在の研究所の上司とは修士時代からよく共同研究や人員の交流を行ってきました。その過程で、現所属機関では日本より大規模かつ多様な飼育実験が行われていることを知り、これらのサンプルが利用可能だと言っただけのためです。

Q: 現在の期間に来られる前に、日本学術振興会の特別研究員 (DC2/PD) として北海道大学に勤務されていたと承知していますが、特別研究員としての経験が、ノルウェーでの研究で役に立っていることはありますか。

A: 現在の研究は、DC2時に確立した測定法が軸になっています。また、DC2では現研究室との共同研究が行われておりました。当時はノルウェーでポストドク研究員をするつもりはありませんでしたが、御縁が続き、連続的かつ発展的な研究ができています。



2019年サマーコースでの
養殖施設の見学



クリスマス(Jul)の風景

Q: 日本と比べて、ノルウェーの研究環境について、どのような印象をお持ちですか？

A: ノルウェーは国策として養殖魚の生産量増大を試みているため、水産業や関連研究に対する予算規模と人材・設備の多様さに感銘を受けました。結果として、水産業は学生にとって非常に魅力的な就職先であるようです。研究を含めた水産業全体が活力を持ち、上手く循環している印象です。その一方で、限られた中でも優れた研究成果を発する日本人研究者の凄さも感じています。

Q: 最後に、これからノルウェーで研究を始めようと考えている研究者にメッセージをお願いします。

A: ノルウェーは治安もよく、気候も(ベルゲンは曇りか雨で)安定しており、ライフワークバランスも良く、さらには水産研究者に対する需要が高いといった多くの利点があります。また、ノルウェーだけでなく他国に住んで研究するというのは、短期の研究滞在よりさらに環境適応能力や生活能力が鍛えられると思います。1年暮らすと不便な点も目につくようになりますが、それを楽しむ姿勢が大切だと思います。



ベルゲンで一番高い山、
Urlikénの頂上



スウェーデン: 英国のEU離脱とその後

2020年1月31日、英国が欧州連合(EU)を離脱した。これに伴い、EU諸国内で制度やルールを改正するための「移行期間」が2020年12月31日まで設けられる。現時点で英国はこの移行期間の延長を望んでいないため、この立場が変わらない限り、わずか11か月で新体制を整える必要がある。

この場合、2020年の交渉は、例えば、自由貿易協定、安全保障分野の協定、ガバナンス構造、紛争解決メカニズムなどの中心分野に焦点を当てて行われる見通し。ただし、移行期間中に解決されなかった課題は、暫定的な措置で対処する必要がある。11か月と残された期間が非常に短いことを考慮すると、移行期間中にどれだけの課題が解決されるのかは不透明だ。

【出典】Government Offices of Sweden

<https://www.government.se/government-policy/brexit/eus-future-relationship-with-the-uk/>



【出典】Elionas2



スウェーデン: 国内初のSDGs専門博士課程プログラムの実施

ルンド大学の持続可能な開発目標(SDGs)に特化した博士課程プログラムが人気を博している。本プログラムはスウェーデンで最初のSDGsを専門的に扱う博士課程プログラムで、2020年度の募集は、12名分の受入枠に対し、すでに1,183名が申請している。

現在、17名の学生が在籍しており、全ての学生がSDGsに関する研究を行っている。

在籍学生に対しては、それぞれ個別に研究プログラムが組まれる。また、大学全体で取り組まれている、地球規模の問題解決に向けた学際的プログラムに参加することになっている。そのほか、SDGsに関連するセミナーや学会、課外学習、本プログラムのステークホルダーとの共同研究の機会も提供される。

本プログラムは、ルンド大学サステナビリティフォーラムと同大学の環境・気候研究センターにより運営されている。

【出典】University World News

<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20200123101649218>



スウェーデン: 大学における研究分野の費用対効果に係る調査結果を公表

スウェーデン王立工科大学(KTH)のUlf Sandström准教授は、国内情報誌Fokus誌と共同で、2012年から2015年における政府や外部機関から獲得した研究費と論文数を比較し、費用対効果の高い順に大学のランク付けを行った。

調査方法は、約10年前に同准教授がスウェーデン政府の委託を受けて、大学の研究費の配分や再配分を決定するために開発した、論文数や被引用数を調査するためのシステムに準拠している。

本調査は、従来の調査では見えてこなかった各大学の強みと課題を明確にすることで、各大学が今後の経営戦略や研究者の育成に活かすことをねらいとしている。

大学の経済規模は、各大学の規模によって左右される傾向があったのに対し、本調査では大学規模の影響が少なく、マルメ大学やエレブルー大学などの小規模な大学もランクインされている。

本調査結果は、スウェーデンのどの研究者の論文が国際誌に最も引用され、最も生産的と見なされるのかを示している。上位10大学は、以下の通り。

1. マルメ大学
2. スtockホルム大学
3. ウプサラ大学
4. カロリンスカ医科大学
5. リンショーピン大学
6. エレブルー大学
7. ルンド大学
8. スウェーデン王立工科大学
9. ヨンショーピング大学
10. ヨーテボリ大学



マルメ大学

【出典】<https://mau.se/kontakt/>

今後は、対象期間を1980年代から2019年まで拡大して調査を実施する予定。

【出典】University World News

<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20191123071102671>



ノルウェー: 研究・高等教育大臣がSDGs達成のためのWG設立を提案

2019年11月13日、パリで行われた国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)総会において、Iselin Nybøノルウェー研究・高等教育大臣はユネスコと共同で、SDGsの達成のためのワーキンググループ(WG)の設立を提案した。

ノルウェーでは2018年に、ベルゲン大学の提案により、国内5大学で構成されたSDGsの達成に向けた委員会が発足した。こうした動きを受け、今回、ユネスコの主導により、この提案がなされるに至った。

本WGは、各大学がSDGsの達成に向けた取組を行うためのガイドラインを作成することを目的としている。今後、WGの事務局を設置し、委員を選定する。その後、審議を経て、最終報告書は2021年のユネスコ総会で提出される予定。

【出典】University of Bergen

<https://www.uib.no/en/news/131654/universities-can-make-difference-2030-agenda>



デンマーク: 2020年度の研究費予算案を可決

2019年11月6日、デンマーク議会は全党一致で2020年度の研究費予算案を可決した。総額は約19億デンマーククローネ (DKK) (*約307億円) で、うち対2019年度比で10億DKK (*約162億円) 増の約15億DKK (*約243億円) が環境分野の研究に配当される予定。

デンマークは、2030年までに温室効果ガスの排出量を1990年比で70%削減するという目標を掲げており、本予算案は当該目標の達成に向けたものと見られる。

【出典】Ministry of Higher Education and Science

<https://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2019/parliament-agrees-to-provide-dkk-1-5-billion-to-green-research>



デンマーク: 留学生のデンマークでの就職促進に向けたプロジェクトの実施

デンマーク高等教育・科学省は、優秀な留学生が卒業後も国内に留まって就職させるための方策を検討しており、その一環として、国内の高等教育機関で実施されている5つの調査プロジェクトに戦略的に助成を行っている。

採択されたプロジェクトの実施期間は、2年から3年で、助成額は50万～100万デンマーククローネ (*約814万円～約1,628万円)。調査結果は、他の機関にも共有しなければならない。

プロジェクトは各機関の学位プログラムに組み込まれており、デンマーク語やメンター制度の教授も含まれている。また、講義だけでなく、企業等と連携して実践の機会をできるだけ取り入れることになっている。

大学、専門学校、芸術系大学から総計16の応募があり、選考の結果、今回の5つのプロジェクトが採用された。選考基準の1つは、「単に留学生が大学に恩恵をもたらすのみならず、卒業後も国内に留まることで、同国の労働市場にとって有益な人的資源となることを考慮して、関係機関との積極的な連携を実証すること」とされた。

5つのプロジェクトの概要は以下の通り。

- ①VIAユニバーシティカレッジ: 留学生のコミュニケーション、学生生活、国際化
- ②KU サイエンス(コペンハーゲン大学): 留学生のキャリアマネジメントスキル向上
- ③ユニバーシティ・カレッジ・アブサロン: 12の専門的な学士プログラム
- ④デンマーク工科大学: 留学生のデンマークの企業への就職支援
- ⑤TEK Innovation (南デンマーク大学): 留学生のキャリアマネジメントスキル向上

【出典】University World News

<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20200109145803904>



フィンランド: AIに関するオンライン講座を無料で配信

ヘルシンキ大学と民間企業Reaktorが共同開発・運営を行っている、AIの基礎に関するオンライン講座を、欧州連合(EU)圏全域に広めようとする動きが注目を集めている。

当時のEU理事会の議長国であったフィンランドからの提案を機に、本コースをEU内の全公用語に翻訳する取組が行われている。EU理事会もこの動きを支持することを表明している。

フィンランド政府は議長国として、EUにおけるAIに対する認知度の向上とそれに関する技能習得を積極的に推し進めており、その一環として、本プロジェクトに170万ユーロ(*約2億700万円)を助成している。

ヘルシンキ大学とReaktorは2018年5月に「AIの基礎」というオンライン講座を公開。公開初日で2万以上の登録希望があり、数か月で目標であった登録者数5万5,000人(フィンランドの総人口の1%)を達成した。

この6週間の講座は、AIやプログラミングの予備知識を必要とせずに受講可能な初心者向けのものとなっている。現在は英語、フィンランド語、スウェーデン語及びエストニア語での受講が可能となっており、110か国の22万人の学生が学習している。

EU圏の大学間の共同の下、新言語への翻訳が進められており、2020年初めに公開される予定である。

本講座を広めるに至った背景には、将来AIをどのように利用していくべきかという課題に対して、より多くの人に考え、議論に参画してもらうという、いわばAIの利用に関する「民主化」を促進するというねらいがある。

世界で活躍するAIの専門家のうち、女性の割合が22%に留まっているのに対し、本講座受講者の女性の割合は40%となっている。また、受講者の25%が45歳以上となっており、この2つの受講者層が本講座の広まりの理由の1つと考えられている。

【出典】University World News

<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20191213090853674>



ラトビア: 高等教育機関に対する実態調査の実施を検討

2019年11月28日、Ilga Suplinska教育・科学大臣は、ラトビアの高等教育機関の数が飽和状態にあることを明らかにした。

現在、既存の高等教育機関には、約16万名の学生を収容できるが、実際、同国の学生数はわずか8,000名にすぎない。これを受け、政府は今後、各機関の状況を調査し、必要に応じて法律や管轄方法を改正していくことを明らかにした。

各機関に対する評価は、各機関の学術成果をもとに行われ、評価の低い機関については、政府による助成を廃止することが検討されている。各機関は今後の達成する能力と国際的な卓越性を示していくことが期待される。

また、同大臣は、同国の研究者数の少ないことから、改革の必要性を主張している。これは、国の研究費が十分でないことを示唆している。

機関への調査は2年をかけて実施していく見通し。

【出典】The Baltic Times

https://www.baltictimes.com/number_of_higher_education_institutions_in_latvia_is_not_optimal_-_education_minister/

エストニア：研究開発費に係る法案が第一読会を通過

2019年10月8日、エストニアの国会において、研究開発費に係る改正法案が第一読会を通過した。改正法案には、GDPの1%を国家の研究開発費に充てることが盛り込まれており、法案が可決されると、2022年より施行される。

これに先立ち、2018年12月19日には、各党首、研究機関、研究者や大企業の間で、同国の研究の発展やイノベーションの創出の確保を目的とした合意の署名が交わされた。2020年の予算案における、研究開発費の割合は、対2019年比で0.03%増の全体の0.74%となっているが、大学側はまだ不足していると指摘している。

【出典】Estonian Public Broadcasting

<https://news.err.ee/989769/bill-to-set-r-d-funding-at-1-percent-by-2022-passes-first-reading>

北欧諸国：「高等教育機関に対する助成金の実態とその及ぼす影響」の調査結果を公表

2019年10月15日、北欧学生支援ワーキンググループ (ASIN) が報告書「Students in Nordic Countries - Study support and economics」を公表した。本調査は、北欧諸国で政府からの助成を受けている925,636名を対象に、助成が研究への取り組み方、とりわけ、研究期間中に別の仕事をする必要性に及ぼす影響などを比較したもの。

報告書では、北欧諸国の学生に対する助成システムは、世界的に見ても優れており、特にデンマークのシステムが際立っていると詳述している。

内容の一部は以下の通り。

- 1ヶ月あたりの助成額の平均
 - ・デンマーク (*約15万円)
 - ・スウェーデン (*約13万6,000円)
 - ・ノルウェー (*約13万1,000円)
 - ・フィンランド (*約10万9,000円)
- 支援を受けられる最長期間
 - ・ノルウェー (7年4ヶ月 (88ヶ月))
 - ・デンマーク (6年10ヶ月 (82ヶ月))
 - ・スウェーデン (4年7ヶ月 (55ヶ月))
 - ・フィンランド (4年6ヶ月 (54ヶ月))
- 支援を受けている学生数
 - ・デンマーク (約29万人)
 - ・スウェーデン (約28万人)
 - ・フィンランド (約18万人)
 - ・ノルウェー (約17万人)
- 1週間あたりの研究における就業時間の平均
 - ・スウェーデン (27時間)
 - ・ノルウェー (20時間)
 - ・デンマーク (13時間)

報告書の詳細は以下を参照。

<http://www.studiestodinorden.org/wp-content/uploads/2019/10/Studerende-i-Norden-studiest%C3%B8tte-og-%C3%B8konomi-2019.pdf> (デンマーク語のみ)

(注) 掲載内容は、ストックホルム研究連絡センターにおいて仮訳し、本文に記載のない箇所では説明が必要な箇所を追記したものである。なお、*については当センターで円換算(概算)した金額である。

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催については随時ホームページでお知らせしています。詳細は、ストックホルム研究連絡センターHP (<https://www.jsps-sto.com/events/category/events/>) を御覧ください。最新情報を御希望の方は以下のURLから登録してください。

<https://www.jsps-sto.com/contact-us/>

●第4回Norway-Japan Academic Network

日時:2020年2月26日(水)

会場:ノルウェー研究評議会(RCN)(ノルウェー)

講師:古賀 詩織氏(Nofima)他

参考:<https://www.jsps-sto.com/event/the-4th-norway-japan-academic-network-seminar/>

※参加を希望される方は、2月20日(木)までに上記ウェブサイトから事前登録をお願いします。

The 4th Norway-Japan Academic Network Seminar
DATE AND TIME: February 26 Wednesday, 2020, 15:00-17:25
VENUE: Research Council of Norway (RCN), Drammensveien 288, 0283 Oslo, Norway
<https://www.forfkningsradet.no/en/about-the-research-council/contact/>
SPEAKERS:
Prof. Jim Tarresen, University of Oslo
Dr. Shiori Koga, Nofima
Dr. CJ Beegle-Krause, SINTER, Board of Alumni Club in Norway
Prof. Thomas Ågotnes, University of Bergen
ORGANIZED BY: The Research Council of Norway, Diku, JSPS STOCKHOLM
Register from HERE by Feb 20!

●第5回Japan Alumni and Researcher Assembly in Denmark (JARA)

～Transnational Exchange in Art and Design～

日時:2020年3月6日(金)

会場:コペンハーゲン大学南キャンパス(デンマーク)

講師:林 道郎氏(上智大学教授)他

参考:<https://www.jsps-sto.com/event/japan-alumni-and-researcher-assembly-in-denmark-fy2019/>

※参加を希望される方は、2月28日(金)までに上記ウェブサイトから事前登録をお願いします。

Japan Alumni and Researcher Assembly in Denmark FY2019
～Transnational Exchange in Art and Design～
Date: 6 March 2020 (Fri) 13:45-18:00
Venue: University of Copenhagen Southern Campus, Room 27.0.09, Building 27, Højevang 136, 2300 Copenhagen S
Organizers: The Embassy of Japan in Denmark, Tokyo University Alumni Association Denmark, JSPS Alumni Club Denmark, and JSPS Stockholm Office
Admission is free of charge!
Registration in advance is required.
Please send an email to tsu@tsu.dk with the following information by February 28:
Name
Affiliation/position
Scholarship scheme (for alumni)

公募情報

●2020年度二国間交流事業(共同研究・セミナー)

(Bilateral Programs)

日本の大学等の優れた研究者が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援する事業。申請締切日は2020年3月23日(月)です。なお、対応機関によって申請の締切が異なりますので御留意ください。

https://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei_bosyu.html (日本語版)

<https://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/call.html> (英語版)

●2020年度外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。各プログラムについての詳細は下記を御参照ください。

2020年度最初の募集は、外国人特別研究員(一般)と外国人招へい研究者(短期)で、3月上旬に募集を開始する予定です。

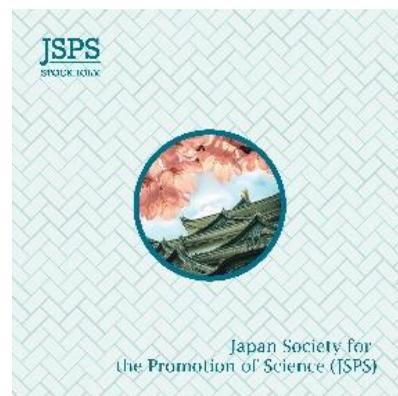
参考:https://www.jsps.go.jp/english/e-inv_researchers/index.html

お知らせ

●ストックホルム研究連絡センターのパンフレットを改訂

当センターの活動概要やJSPS本部の国際交流事業に関する最新情報をまとめたパンフレットを改訂しました。HPからも御覧いただけます。

<https://www.jsps-sto.com/wp-content/uploads/2019/07/2019brochure.pdf>



●メールマガジンの配信

2019年4月からメールマガジンの配信を開始しました。当センターで実施するセミナーやシンポジウム、同窓会活動だけでなく、招へい事業や研究支援事業の募集等最新の情報をメールにて配信しています。配信を希望される方は、<https://www.jsps-sto.com/newsletter-2/emailmagazine/>から御登録ください。今後も随時配信してまいりますので、是非御講読ください。

その他

日本人研究者の会について

ストックホルム研究連絡センターでは、北欧諸国及びバルト三国で研究活動を行っている研究者を対象に、イベント情報の発信やネットワーキングのためのイベントを開催しています。まだ、当センターの研究者リストに登録いただけていない方は、こちら(<https://www.jspss-sto.com/to-japanese-researchers/>)から登録してください。ニュースレター、各種セミナー、イベントの情報を定期的にお知らせします。

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合は、以下のウェブサイトから登録してください。電子メールにて配信します。
<https://www.jspss-sto.com/newsletter-2/>

「EU一般データ保護規則(GDPR)」の適用を踏まえた個人情報の取扱いについて

2018年5月25日よりGDPRが施行されたことを踏まえ、ストックホルム研究連絡センターでは当規則に基づいて個人情報の取扱いに留意しています。北欧在住の日本人研究者を含む関係者の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。GDPRの施行を踏まえた個人情報の取扱いに関してお問い合わせがございましたら、当センターまでお知らせください。

表紙写真: 世界最大のダーラヘスト

ダーラヘストとは、スウェーデン・ダーラナ地方発祥の伝統工芸品の1つである木彫りの馬を指す。日照時間が短いスウェーデンの冬に、仕事を早めに切り上げた木こりたちが、子供の玩具として、余った木材で作ったことが始まりとされる。写真のオブジェは、スウェーデンダーラナ郡アーベスタ市に存在する。

(撮影 吉中真優)

次号の発行予定日:

次号は2020年5月下旬に発行予定。



JSPSストックホルム研究連絡センター 第65号

編集長: 吉原 誉夫

編集: 吉中 真優

発行日: 2020年2月17日(月)

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <https://www.jspss-sto.com>

E-mail: jspss-sto@jspss-sto.com

Facebook: [JSPS Stockholm Office](#)

JSPS
STOCKHOLM